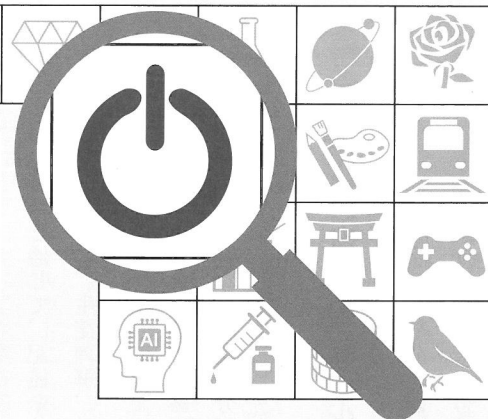




情報生産者を育てる

高橋みゆき
(群馬県立伊勢崎高等学校長)

大きなテーマは解決できないでしょ! まず、ほとんどの生徒がこの言葉の洗礼を受ける。

「上野ゼミに入ったのだもの。立派なテーマを立てなきゃ」。多くの生徒は、張り切って大層なテーマを設定してしまう。「頑張って立派なテーマを考えたのに、小さくしろですって?」。大物に教えを乞うというだけで前日から緊張しているのに加えて、意外な指示に拍子抜けし、頑張りすぎていた自分から解放されることで気が緩んだ瞬間、涙があふれ出る。

この「問いを小さくする」ということは、本校の「蒼穹」でも大切な掟となっている。情報生産者になるということは、まだ誰も得ていない情報、つまり一次情報を取ることである。文献やネット上にある情報は、誰かが作り出した二次情報であり、これらを集めてまとめることは「調べ学習」であって「探究」とは言えない。大きすぎる問いを立てた場合、手に負えなくなり、その多くが調べ学習で終わる。

自分だけの一次情報を生産するために

伊勢崎高校「TanQ」スクール (上野ゼミ)

群馬県立伊勢崎高校には、東京大学名誉教授の上野千鶴子氏のゼミがある。そう聞くと、大概の人は「何で?」と目を丸くする。確かに地方の一公立高校に、あの上野千鶴子氏のゼミがあるとは、誰もが信じがたい話である。何がきっかけかについては、後述することにする。

本校の探究活動は「TanQ」(あいたんきゅう)という名前が付いている。「総合的な探究の時間」(「TanQ 蒼穹」)に加え、学校を超えて社会そのものを知るためのフィールドワーク「TanQ スタディーツアー」、学校の枠を超えて全国の人々と交流する「TanQX」など、唯一無二のプログラムが生徒たちの探究活動を後押ししている。その中でも超目玉であり、話題性バツグンのプログラムが、上野氏をアドバイザーとして迎えた「TanQ スクール」、通称「上野ゼミ」である。

上野ゼミは2024年度から始まった。2023年3月末の開校式から始まり、9

は、どのような問いを立てたらよいのか。

生徒たちは問いを立て、進んでは行き詰まり、また進んでは戻り、しばらくの間、悶々とした時間を過ごすことになる。そして、私たち教員も悶々とした時間を共有する。どんな生徒でも、一度は「何で探究など始めてしまったのか」と後悔の念を抱く瞬間があるのではないだろうか。探究は「問いを立てる」ことが最も難しく、時間を要する。しかし、この悶々とした時間こそが最も成長しているときだということに、生徒自身も私たち教員もいつも終わってから気付く。

悶々とした時間の果て、ある生徒の「日本の高校生の自転車事故を減らすためにはどうしたらよいか」という問いは、「伊勢崎高校の西側の道路における自転車事故をなくすにはどうしたらよいか」に変わり、別の生徒の「高校生が英語を話せるようになるための効果的な勉強法」という問いは、「私の英語力上達法」に変わった。

誰のための、何のための探究か

月末までの約半年間でおおよそ15回のゼミが開かれた。現在、2025年度のゼミ生たちは2期生であり、本校生徒の他、市内の中学生、山形・岡山・長崎の高校生もオンラインで参加している。教科書となるのは、上野氏の著書『情報生産者になる』(筑摩書房)だ。日頃の指導は、本校の探究部の教員と筆者らで行っているが、要所要所で「上野先生登場」となる。

「問い」は小さく立てる

上野氏が登場する最初のゼミで、涙を流す生徒がいる。昨年は2人。そして今年は1人。「やはりそんなに厳しいのか」と驚かれる方もいるかもしれないが、そうではない。「最近の上野先生は優しくすぎる」と筆者は思っている。「もつと厳しくなくては上野ゼミではないではないか。どうした? 上野千鶴子!」と密かに心の中で発破をかけている。ポーカーフェイスを装っているが、きつと上野氏は高校生がかわいくて仕方がないのだろう。

「もつと問いを小さくしなさい。そんな

探究を推進するうえで、教員間で大切にしていることは他にもある。「探究は大学入試のためではない」ということだ。

近年、大学入試において総合型選抜が増える傾向にあるが、本校では、それを目的に探究をしていない。では、何のためにしているのか?と問われれば、「生徒が自ら学ぶ楽しさに気付くことで、生涯学び続けてほしい。そして社会を変えていける人になってほしい」ということだろうか。

前任校でも探究活動を推進してきたが、その過程で、探究コンテストの類に応募していた時期がある。あるコンテストの評価基準に「地域を広く巻き込み、多くの大人を巻き込んでいるか」とか「社会にインパクトを与えているか」のような項目があった。このような条件を突きつけられることで、どれだけ多くの教員が探究に対する負担感や疲弊感を感じているだろうか。

地域の特産物を利用し、企業と連携して新たな商品を開発し、空き家を改装した店で販売することで町おこしなどというプロジェクトは確かに素晴らしい。しかし、全日